

描けない一貫性と連続性をもっている。

(早瀬晋三・早稲田大学国際学術院大学院アジア太平洋研究科)

飯島明子；小泉順子（編）。『タイ史』山川出版社，2020，ix+422+97p.

本書は、先史時代から現代までのタイの通史をまとめた一般書である。歴史教科書で著名な山川出版社による通史シリーズとしては1999年に刊行された『東南アジア史I, II』が存在するが、こちらが「新版世界各国史シリーズ」に含まれるのに対し、本書は「世界歴史大系」シリーズの中の1冊として位置づけられている。本書も一般書ではあるものの、参考文献欄にはタイ語や英語を含む数多くの先行研究が記載されており、具体的な一次資料や最新の研究成果に言及している箇所も多い。本文中での出所の明記もなされていることから、『東南アジア史I, II』よりも専門書的な色合いが濃く、対象とする読者層も一ランク上の感がある。

「はじめに」の記述によると、本書の刊行は当初2000年頃に故石井米雄氏を編者として行う計画で動き出したようであるが、石井氏が2010年に亡くなったことで計画は一時頓挫してしまった(p.i)。しかしながら、既に石井氏の担当する章の原稿は完成していたことから、新たな編者の下で計画は再開され、最終的に2020年によく陽の目を見ることとなった。

本書は最初の序章に続き、古代から現在に向けて時系列に計7つの本章が配置されており、執筆者はそれぞれ異なる。最初の序章「タイ史から何を学ぶか」は編者の1人である飯島明子氏によるものであり、本書で扱う「タイ史」の前提として、タイにおける「公定史観」に基づく歴史について、それに異を唱えてきたトンチャイ・ウイニツチャクーンやチャーヌウィット・カセートシリなどのタイ人研究者の著作や言動を踏まえながらその問題点を指摘している。

第1章「先史・古代のタイ」は新田栄治氏が執筆した部分であり、タイにおける人類の出現からタイ族が現在のタイの領域に入ってくるまでの時

代を扱っている。新田氏の専門は考古学であることから、本章の内容も先史時代に重点が置かれており、とくに稲作農耕社会が成立した後の青銅と鉄の時代の記述が充実している。古代については、現在のタイ領内に出現したドヴァーラヴァティと、その後東北部や中部に勢力を伸ばしたクメールについても十分言及されているが、マレー半島についてはやや記述が少ない印象を受ける。

第2章「北方の『タイ人』諸国家」は飯島氏の手によるものであり、13世紀に出現したスコタイとランナーという2つのタイ族国家を中心に、その盛衰を取り上げている。「公定史観」に基づく単線的王朝史観ではスコタイ～アユタヤーとつながっており、北部の中心地チエンマイを中心に栄えたランナーはあくまでも「脇役」でしかないが、飯島氏の専門がランナーなどまさに北方の「タイ人」諸国家の歴史研究であることから、本章ではスコタイよりもむしろランナーが主役となっている点が大きな特徴である。「公定史観」では、スコタイは15世紀にもアユタヤーの配下に置かれて事実上吸収されたことになっているが、ランナーはその後ビルマ族による支配を経て最終的に20世紀初頭にバンコクに併合されるまで独自の政権を維持していたことから、ランナーの歴史のほうがスコタイよりもはるかに長い。このため、本章でもランナーの扱いのほうが大きくなっているのである。

第3章「港市国家アユタヤー」は当初の編者であった石井氏が担当した部分であり、アユタヤー（アヨータヤー）の成立から滅亡までの時期を扱っている。石井氏は既に『タイ近世史研究序説』を始めとして数多くのアユタヤー史に関する学術書や一般書をまとめているが、時期的に見ても本書はこれまでの石井氏のアユタヤー史研究の成果が最大限に反映されたものと思われる。とくに、「公定史観」において「タイ史を北から南へ向かう陸域的発展ととらえる立場を離れ」、「海洋勢力の内陸へ向かっての発展過程としてとらえている」点の特徴である(p.149)。このため、本章においては交易を介した諸外国との国際関係の変遷に重点が置かれており、アユタヤー外交史としての側面が強い。

第4章「華人の時代」はアユタヤーの滅亡からタークシン王による国内の再統一を経てラタナコーシン朝へと継承されていく過程を対象としており、19世紀前半のラーマ3世王期までの比較的短い時期となっている。執筆者の増田えりか氏はまさにこの対象時期のタイ中（清）関係史を専門としており、それは本章のタイトルにも反映されている。この時代は政治、経済面でも対中関係が重視された時期であったが、やがて欧米諸国との関係強化へと舵取りがなされる変化の時期でもあった。また、アユタヤーを滅ぼしたビルマとの確執のみならず、新たに成立したベトナムの阮朝との勢力争いも発生したことから、やはり国際関係に重点を置いた構成となっている。

この国際関係重視の記述は、次の第5章「絶対王政の構築」まで続く。この章はもう1人の編者である小泉順子氏が担当し、対象時期はモンクット（ラーマ4世）～チュラーロンコーン（ラーマ5世）王期の約60年間となる。この時期は本章のタイトルのごとく「絶対王政」が成立した時期、すなわち自立性の高かった地方の統治権をバンコクの国王が掌握していくという中央集権化が推進された時期であったが、同時にその自立性の高い周縁部の朝貢国（プラテーサラート）をめぐって列強との対立が顕在化した時代でもあった。このため、とくに英仏との関係はこの時代を語るうえでの中心的なテーマであり、やはり国際関係への目配りが重要となってくる。しかしながら、小泉氏の主要な研究テーマでもある臣民への徭役やタート（奴隷）の廃止といった社会史面の記述も充実している。

ここまでは通常の通史と同じく、政治史や外交史を中心に時系列に沿って話が進められてきたが、最後の2つの章はテーマ別の構成となっている。第6章「現代の政治」は、1910年からのワチラーウット（ラーマ6世）王期から現在に至るまでの100年あまりの政治史を概観したものである。執筆者の玉田芳史氏は日本におけるタイ政治研究の重鎮であり、王権の変化、軍の政治関与、民主化などに焦点を当てながら約1世紀にわたるタイの政治史を簡潔にまとめている。とくに印象的な点は、この章の5つの節のうち4つまでもが「王」

や「君主」というキーワードを含んでいることであり、絶対王政から立憲君主制へと変化したものの、依然としてタイ政治を考えるうえで王権が重要な役割を果たしていたことを示唆している。

そして、最終章となる第7章「現代の経済・社会」ではさらに対象期間が長くなり、1855年のパウリング条約締結、すなわちモンクット王期から現在までの約160年間のタイ経済・社会の動向をまとめている。執筆者の末廣昭氏も日本におけるタイ経済研究の第一人者であり、とくに資本家の勃興や企業グループの形成に焦点を当てた研究を行ってきた。本章も1950年代まではそのような側面が重視されているが、1960年代以降は政府の経済政策の変遷が話題の中心となり、21世紀に入ると少子高齢化や格差といったタイ社会の抱える課題にも焦点が当てられている。本章では多数の図表を用いた説明がなされている点も特徴であり、ビジュアルな構成も他の章とは大きく異なっている。

以上、本書の概要を見てきたが、評者は本書の意義を以下の3点に見出した。1点目は、日本語で書かれた唯一の本格的な「タイ史」としての重要性である。「東南アジア史」に関する一般書は近年増加傾向にあるものの、「タイ史」については拙著『物語 タイの歴史』くらいしか存在しない。最初に述べたように、本書は一般書ではあるものの内容は十分に専門的であり、学術的な価値も高い。執筆陣も日本を代表する研究者から構成されており、現在日本人が執筆するタイの通史としては最高レベルに達していることは間違いない。複数の執筆者によって書かれている以上、章による多少のばらつきの発生は不可避ではあるものの、本書のレベルは単著の限界をはるかに上回るものであり、複数の執筆者による編著の優位性を遺憾なく発揮している。

2点目は、「公定史観」への挑戦の成果が随所に盛り込まれていることである。とくに、前近代までの「タイ史」はこの「公定史観」に束縛されている部分が少なからず存在しているが、それを覆すための研究はタイ内外で盛んとなっており、それらの研究成果を十分に反映させながら新たな「タイ史」を構築しようという努力を垣間見ること

ができる。その最大の成果がランナー史の位置づけであり、「タイ史」の中でこれだけランナー史の比重を高めた書籍は、世界的にも本書が唯一無二のものであろう。もちろん、これは飯島氏が執筆に参加したという背景が大きいのではあるが、このランナーの位置づけも本書のオリジナリティーを高める重要な要素となっている。

3点目は、2つの章に分けた現代史の構成である。対象としている時期が長いことから、単に「現代」と謳っている点にはやや違和感も覚えるが、現代史を大きく政治史と経済史に分けて独立した章を設けた点も、本書の大きな特徴の1つである。通常の通史においては、第5章までのような政治史や外交史を主軸としての語りが一般的であり、経済史は「脇役」であることが一般的である。ところが、本書においては近現代の経済史に独立した章を充てており、この間のタイ経済・社会の変化が十二分に説明されている。通常の通史を読んでも経済史に関する情報は断片的にしか得られないのが普通であるが、本書は良い意味でそれを裏切ってくれる。これも、第1点目で述べたような複数の執筆者による編著であることの賜物と言えよう。

最後に、評者の抱いた若干の要望と疑問点を提示して本稿を締めくりたい。本書にはタイ国内の地名が数多く出てくるが、掲載されている地図が非常に少なく、しかも県レベルまでの地名しか載っていないことから、大半の読者にとって場所の特定が困難であると予想される。とくに、第1章では数多くの遺跡名が言及されているが、この章には地図が全く存在せず、タイの地名にはそれなりに詳しい評者でも具体的な場所が思い浮かばない地名も存在した。また、近代においては朝貢国の名前も多数出てくるものの、現在のタイ国外に位置する地名の一部はやはり地図に載っておらず、この地域の地理に詳しくない読者にしてみれば、この辺りにも地図が欲しいところであろう。

また、ランナー史の比重の高さが本書の特徴の1つであると述べたが、ランナー以外の政治権力についての扱いも気になるところである。本書で扱われた北方の「タイ人」諸国家には、やや発生時期がずれるもののランナーと共にラン

ナーも存在する。「タイ史」を「公定史観」からとらえれば、現在のラオスの起源でもあるランナーに言及しないのは至極当然ではあるものの、東北部の大半の地域がその影響下に置かれていた時期があることや、共に自立性を維持していたランナーよりも先にランナーがバンコクに平定されたという事実から見ても、その位置づけも検討したほうが良いと思われる。もっとも、「タイ史」にランナーが取り上げられると、ラオスの「公定史観」からの反発が出る可能性はあるし、そもそもこれは一国史の限界と言ってもよいのかもしれない。同様に、南部のマレー人朝貢国についても、「タイ史」の中の構成要素として検討していただきたい点である。とくに、バタニ王国は現在のタイの領域内がかつて栄えた政治権力であり、そのバンコクへの併合が現在この地域の抱える治安問題の重要な背景となっていることから、より丁寧な扱いが求められよう。

いずれにせよ、本書が本格的にタイの歴史を学びたい人にとっての必読書であることは間違いない。願わくは、この「世界歴史大系」シリーズに取り上げられる東南アジアの国が続くことである。

(柿崎一郎・横浜市立大学国際教養学部)

引用文献

- 石井米雄. 1999. 『タイ近世史研究序説』東京：岩波書店。
 柿崎一郎. 2007. 『物語 タイの歴史——微笑みの国の真実』東京：中央公論新社。

||||| 藤井真一. 『生成される平和の民族誌——ソロモン諸島における「民族紛争」と日常性』 |||||
 ||||| 大阪大学出版会, 2021, xv+306p. |||||

人類学の現代的意義とは何か。「人類学の危機」[cf. 青木 1985] を克服すべく、人類学者は本来の独壇場であった未開文化の消滅とともに研究対象と主題の再構築を迫られてきた [杉島 2001]。栗本 [2001] は、人類学の存在理由のひとつである支配的な言説とシステムに対する批判的精神が現代の紛争研究にも充分に発揮されるべきだとし、